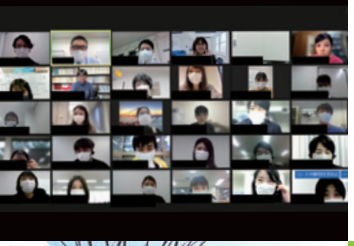


KANSAI UNIVERSITY

CTL Newsletter

Kansai University Center for Teaching & Learning

関西大学 教育開発支援センター
ニューズレター

March 2022
vol.38

大学の主体は学生たちである
―学びの場の柔軟なサポートのために―

教育開発支援センター長　関口 理久子

ニューズレターの巻頭言の前回担当時は、2020年の特集号(2020年8月発刊)であった。その号では、それまでの穏やかな日常から突然のコロナ禍へと放り込まれ、どのように学生たちや教職員が過ごしてきたかの報告が主なものであった。それから時を経て、2021年度も終わりに近づく現在、未だコロナ禍の最中にありながらも大学はある程度平静さを取り戻しつつあるように思われる。CTLの活動もコロナ禍以前同様順調であると同時に、新たな取り組みも始動している。その中の一つに、秋学期のFDフォーラムは、教学IRフォーラムとの合同で行われた。フォーラムの詳細はこのニューズレターの次ページをご覧いただくことにして、そのフォーラムに参加して私が思ったことを述べたい。

人が目的を持った行動を自律して遂行するために必要な能力として、実行機能という機能がある。実行機能という用語は包括的な用語として使用されており、詳しく個々の機能を説明すると、目標やプランを立て、目的な行為を遂行できる能力、また、常に自己の行為や考えをモニタリングし、必要ない行為は抑制して自己コントロールできる能力、そして、環境の変化や新しい刺激に対して、柔軟に考えや行為を切り替えることができる認知的な柔軟性などが実行機能である。これらの機能は児童期から青年期にかけて発達し、大学生を含む成人前期において成熟のピークに達する。しかし、その後加齢とともに低下し、逆U字型の発達を示すとも言われている。実行機能の中でも特に認知的な柔軟性は、外界の変化に応じて自分の反応を切り替え、失敗から学び、他の選択肢や方法を考え出し、多くの情報に同時に注意を配分して処理する能力である。コロナ禍で突然遠隔授業を余儀なくされた時、学生たちや教職員は皆この認知的柔軟性を駆使して対応をしたと言ってよい。

2年近くに渡るこのコロナ禍において、私も含めた教職員は、教育の質を低下させまい、学習環境を整備しよう、教員の指導方法や遠隔授業への対応を支援しようと皆が努力してきた。その甲斐あって、大学はコロナ禍以前と同じ、またはそれ以上の質を保っていると思われる。しかし、学生たちに不便をかけまいとするあまり、時々学生たちはどうしたいのかを忘れ議論しがちになる時がある。大学の主体は学生たちである。学生たちがどのように学びたいのか、そのために何が必要で、どのような学習環境が望ましいと考えているのか、彼ら自身に語らせる機会がもっとあってもいいのではないかと気付かされたのが先日の合同フォーラムであった。認知的柔軟性は加齢とともに低下すると言われている。認知的柔軟性が低い人は、融通が利かず、形式的であり、変化に適応できない。最も認知的柔軟性の高い学生たちに負けず私たちも柔軟に考え行動することが必要である。

活動報告

関西大学 教学IR/FD合同フォーラム「コロナ禍の経験を踏まえて、これからの学生の学びと成長をどう支え促すか」を開催しました。

日程：2022年2月26日（土）

2022年2月26日に、関西大学教学IR/FD合同フォーラムを開催しました。新型コロナウイルス感染症の蔓延を機に、学生の学びを取り巻く環境は一変しました。学生の現状を把握し、教育効果の向上に役立てるため、学生や教員を対象とした調査や教学IRに多くの大学が注力しています。そして、各種調査などで得られた結果から学生の真のニーズを汲み取り、ニューノーマルに対応した新しい教育を導くことが重要となります。こうした問題背景から「コロナ禍の経験を踏まえて、これからの学生の学びと成長をどう支え促すか」を統一テーマとする本フォーラムを開催しました。

前半の教学IRフォーラムでは、共愛学園前橋国際大学・短期大学部学長の大森昭生氏を講師として、「学修者本位の学びに向けて：教学マネジメントの理念と学修成果の可視化の実際」というテーマで基調講演をいただきました。次いで、関西大学、法政大学の2大学の事例が話題提供として発表されたのち、パネルディスカッションでは、コロナ禍の経験を踏まえた今後の大学の在り方について意見交換を行いました。

後半のFDフォーラムでは、東北福祉大学教務部副部長・准教授の松本祥子氏を講師として、「東北福祉大学における初年次教育（リエゾンゼミ）と学生支援（中退防止）の取組」というテーマで基調講演をいただきました。次いで、立命館大学における事例発表、関西大学学生による話題提供がありました。パネルディスカッションは、学生・教員・職員による三者協働を体現する形となり、よりよい教育・学習環境作りのためにこれから取り組むべき課題を共有する貴重な機会となりました。

当日の参加者数（最大時の視聴者数）は、前半が178名、後半が143名でした。参加者アンケート（149名）では、総合満足度94.6%と多くの参加者から高い評価をいただくなど、有意義なフォーラムとなりました。

（教育推進部教授　山田剛史、
教育開発支援室・教学IR室　上田果歩）

教学IRフォーラム（午前）の様子

FDフォーラム（午後）の様子

関西大学北陽高等学校との連携講座「ノートテイキング講座」を実施しました。

日程：2022年1月20日（木）

1月20日（木）千里山キャンパスにて、教育推進部と関西大学北陽高等学校が連携し、本学進学予定の3年生約260名の生徒を対象に「ノートテイキング講座」を実施しました。本連携講座は、北陽高校の生徒が大学入学前に大学の授業におけるノートテイキングの重要性について理解し、効果的なノートテイキングスキルを身に付けることで、大学での学習へスムーズに移行できるようにすることを目的として開催したものです。90分間の講座では、ノートテイキングの必要性についての解説、およびレポートの書き方に関する模擬講義が行われ、生徒は実際にノートテイクをしてみることで効率的に学びを進めていました。生徒からは「自分が4月から必要なことなので説得力があった」「高校と大学の違いを知ることができた」などの感想がありました。

（教育推進部特別任用助教　藤田里実）

ノートテイキング講座の様子

2021年度FD/SD研修「三者協働でこれからの授業を設計してみよう～コロナ禍での経験を踏まえて～」を開催しました。

日程：2021年10月26日（火）、11月9日（火）、11月30日（火）、12月7日（火）、12月21日（火）、2022年 1月18日（火）

教育開発支援センターでは、2021年10月26日（火）～1月18日（火）の間、2021年度FD/SD研修を開催しました。本研修は、教職員と学生が連携してこれから取り組むべき課題を発見し、社会の変革に対応しながら、時代に即した教育を展開できる能力を育成することを目的に2017年度から実施しています。

本研修は全5回で構成され、終了後には計8班（学生と教職員の混合）による最終報告会の機会を設けました。各回の講師は教育推進部の教員が担当し、それぞれの専門領域に基づく大学教育の現状や課題、今後の展望等について講演いただきました。

また、最終報告会は1月18日（火）に開催しました。今年度は共通教養科目を題材にし、5年後の授業を設計し、シラバスに落とし込むまで具体化できました。

研修参加者からは、「学生目線で実際にあったらいいなと思う授業を職員の方と設計できた。」「教員と学生と同じ立場で議論するということが新鮮で印象深い経験でした。」等の感想をいただきました。

次年度以降も内容の改善を行うことで、ウィズコロナ、アフターコロナの社会に貢献できる人材を育む研修になるよう努めていきます。

（教育開発支援室　西村瑛皓）

FD/SD研修の様子

ラーニングcaféを実施しました。

日程：2021年12月23日（木）、2022年1月13日（木）

今学期最後のラーニングcaféでは、2021年12月23日に「スケジューリングを武器にしよう」、1月13日に「自分の印象をメンテナンスしよう」を実施しました。

今回のラーニングcaféでは、新メンバーとなったLAを中心に、LA自身が実践しているスキルや知識をもとに企画を立てました。

少数参加ということで実施場所をオンラインからKITENE（Kandai InTEractive NEtwork room）に移し、対面で実施したところ、参加者からは、「たくさん話ができて楽しかった」「思考力が鍛えられた」「これからの活動に役立てたい」「楽しくためになった」といった感想をいただきました。

オンライン・対面両方を体験したLAからは、「1つの企画に対面とオンライン両方で参加できる仕組みが作りたい」といった今後のニーズを意識した振り返りもあり、LAにとっても新たな気づきを得る場になりました。

（教育開発支援センター アドバイザリースタッフ　佐藤栄晃）

ラーニングcaféの様子

ラーニングcaféの感想

ラーニングcaféを運営するにあたり、ワークの充実化、caféをより身近なものに、という2つの目標のもと活動を進めていきました。最終的に、自分たちの体験をもとにしたスケジューリングというテーマに決定しました。テーマやワークの内容自体は身近なものでしたが、学生同士の距離が遠いという課題が見受けられました。今後は、伝え方の工夫や双方向のコミュニケーションを意識し、より楽しめるものにしていきたいです。

（法学部1年　梅園涼央）

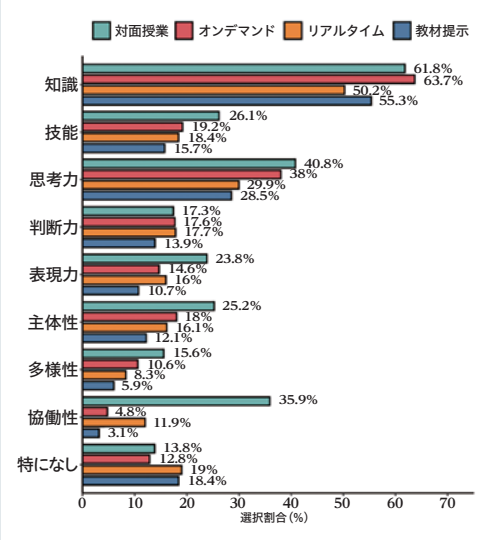
教学IRプロジェクト報告

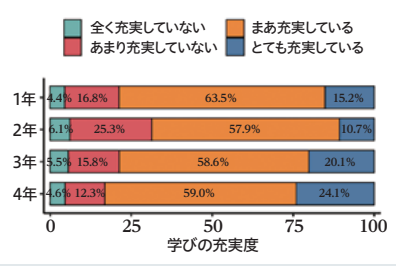
「2021年度秋学期 授業・学生生活に関するアンケート」を実施しました。

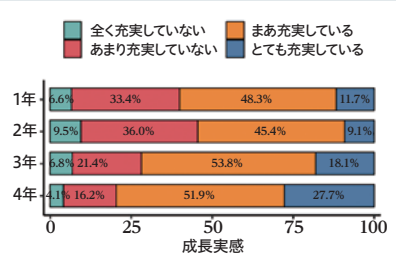
日程：2021年12月6日（月）~2022年1月6日（木）

教学IRプロジェクトでは、2020年度春学期・秋学期と2021年度春学期に続いて、2021年度秋学期の授業や学習、学生生活に関するアンケート調査を実施しました。上記の期間に、在学生27,736名を対象として実施し、3,737名（回答率13.5%）から回答を得ました。全体、所属学部ごとの集計結果、特に重要と考えられる項目を抜粋し、これまでの調査との比較や学年ごとの集計などを含めた資料を作成し、教学IRプロジェクトのHPで公開しています。また、これらの資料に基づいて、大学執行部、各学部執行部、学外（ダイジェスト版のみ）に向けて調査結果を周知するなど、改革・改善に資するフィードバックを実施しています。主な結果として、授業形態間で「学力の3要素」の小領域の獲得感を比較してみると、ほとんどの要素が、対面授業においてもっとも高いことが示されました。また、学びの充実度と成長実感について学年間で比較すると、コロナ禍に入学した2年生がどちらももっとも低いことが明らかとなりました。

（教育推進部特別任用助教　矢田尚也）







書籍紹介

『大学生の学びを育むオンライン授業のデザイン』

岩﨑千晶（編著）

本書は、高等教育におけるオンライン授業を設計するための入門書である。講義、実験、実習、外国語を「リアルタイム・オンデマンド・ハイブリッド型のオンライン授業」でどう実施しているのか。教育工学者による「理論編」と大学教員18名による「授業実践」で構成された理論と実践の往還を目指した1冊となっている。

260頁　A5版　定価 本体¥2,300+税
（関西大学出版部）

『教師のための教育効果を高めるマインドフレーム』

ジョン・ハッティ（著）、クラウス・チィーラー（著）

学習を成功へと導く授業とは? そのために、教育者はどのように自身の指導と役割を考えればよいのか。熟練教師の実践知とメタ分析によるエビデンスを融合。教師のコンピテンシーと両輪となって、教職専門性を支える10の「心的枠組み」を示す。メタ認知、フィードバック、協働的な学びなど、現場の教師のリアルな課題に応える。

（教育推進部特別任用助教 矢田尚也が1~3章の訳者となっております。）

324頁　定価 本体¥2,700+税（北大路書房）

From CTL事務局

もぐもぐタイム。「いいと思う」「ナイスー」シンプルだけど、相手の意見や行動を認め反応する言葉。そして、相手を安心させる言葉にも聞こえた。コロナ禍で、相手となんとか接点が持つことができる「オンライン」というツールを得るも、コロナ禍前のように安心感につながるコミュニケーションはできていただろうか。先日の教学IR／FD合同フォーラムにおける関大報告では、学生同士や教員との「学びあい」「人とのつながり」が大学における学びの充実感や成長実感につながっているという。冒頭「いいと思う」「ナイスー」の言葉は、授業や学生生活においても、安心安全な空間・学習環境・人間の成長につなげることができる“きっかけ”のワードかもしれない。先行き不安な日から脱却できることを願い、まずは「そだねー」の超シンプルな声掛けからはじめてみましょうか。

（未来を信じ 未来に生きる）

KANSAI UNIVERSITY
関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching & Learning
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL: 06-6368-0230　FAX: 06-6368-1514
https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html
発行日／2022年3月23日　編集・発行／関西大学 教育開発支援センター